氏　　名	李　舜炯
所　　属	人文科学研究科　人間科学専攻
学 位 の 種 類	博士（　日本語教育学　）
学 位 記 番 号	人博　第 96 号
学位授与の日付	平成 28 年 9 月 30 日
課程・論文の別	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題名	談話分析からみた日本語学習者と母語話者の聞き手言語行動の実証的研究
論文審査委員	主査　ダニエル　ロング 委員　西尾　純二　(大阪府立大学) 委員　奥野　由紀子

【論文の内容の要旨】

1. 研究背景と目的

日本語非母語話者である筆者が日本語の会話において「話し手もまた聞き手であるはずだ」という考えを持ったのはそれほど昔のことではない。教育現場に携わった際にも、質問者 - 応答者の役割がはっきりと分かれている教科書の会話文を教えることに疑問を持たなかった。ちょうど10年ほど前、円滑なコミュニケーションのための日本語教育を考える雰囲気が広がりをみせたとき、「何を教えるか」を再考するために、使用していた教科書を見直したのが会話における話し手、聞き手の役割に注目するきっかけとなった。教科書の会話文が現実のコミュニケーションとかけ離れていること、とりわけ、日本語学習者は言語能力レベルが低ければ低いほど会話のやりとりのなかで話し手よりも聞き手の役割を担うことが多いのに、聞き手の言語行動についてはあまり考慮されていない会話文の構成になっていることに気づき、教育現場で指導する必要があることを改めて実感した。

しかし、具体的にどのように教育に結びつけるかは見当がつかず、ただ、日本語でも韓国語でも「あいづち：맞장구(マッチャング)」という語は日常的なものとして存在しているので、日本語の会話ではあいづちを打つ頻度が高いことに注意しながら、それ以外は母語を使用する感覚で日本語のあいづちを使用すればいいと考えるだけであった。しかし、「『はいはいはい』と連発するな」、「『オオ』ってなに」、「李さんの『そうなんですか』に違和感を覚えます」という類の指摘が相次いだ。あまり似ているからその違いに気がつかず、日本語も韓国語も同様だと思っていたのであるが、そうした指摘にショックを受けた。また、円滑にコミュニケーションが取れるほど日本語が上手であるにも関わらず、簡単なあいづちを間違うはずがないという母語話者の誤解があることも分かった。このような現状では円満な人間関係の構築というコミュニケーションの目的は果たされないに違いない。

ここでいう上手な日本語とは、正しい日本語ではなく、ふさわしい日本語のことであろう。ふさわしい日本語は聞き手と話し手の関係、性別、世代、状況などによって決まっていく。これまでの日本語教育現場では、正しい日本語の教育が優先され、ふさわしい日本語については教育が及んでいなかったのではないだろうか。上述の「はいはいはい」、「オオ」、「そうなんですか」は全て日本語のあいづちとして使用される表現である。日本語としては正しいことは間違いないが、その場にふさわしくないということが問題である。現実の場面での日本語の会話は、聞き手と話し手との協力にもとづく相互作用である。ここで重要なことは、会話は単なる情報のやりとりではなく、人間関係の構築にも関わるということである。ふさわしいあいづちの運用ができ

ず、相手に誤解を与えることはコミュニケーションギャップを作ってしまうことにつながる。そして、そのコミュニケーションギャップの大部分は、「聞き手」としての役割が十分に果たされていないことに起因しており、たとえば、何となくコミュニケーションがうまくいかない、または会話がうまく進まない、ぎこちなさを感じると言われることが多い。あいづちを打たずに相手の話を聞くことに終始してしまったり、日本語母語話者が用いないあいづちを使ったり、またはふさわしいあいづちを用いたものの、それ以上は話が進まず、会話が途切れてしまったりする場合である。反対に、非母語話者である筆者が同じ非母語話者であるインドネシア人日本語学習者と日本語で会話をする時、「なんでこんなに会話が上手なんだろう」、「話の乗りがいい」と感じた理由のひとつに、聞き手としてのふさわしいあいづちの運用ができていることが考えられる。

相手との相互作用である会話では、日本語そのものの知識だけでなく、どのようにコミュニケーションを行うかということが重要になる。実際のコミュニケーションは、刑事ドラマの取り調べの場面のような、日本語教育で用いられている会話文とは異なり、話し手が文の途中に「ね」を挿入して聞き手の反応を求めたり、文が完結しないうちに発話を終えたりする一方、聞き手は話し手の発話を確認、補足したり、時には話し手の発話を引き取って完成させたりしている。このように話し手と聞き手が会話を共同で作り上げていく共話(Co-construction)が日本語の会話形態のひとつになっている。つまり、日本語の会話において話し手と聞き手は、互いのフェイスを守りながらコミュニケーションをとる必要がある。ブラウンとレビンソン(Brown & Levinson 1987)によると、「フェイスは、やりとりの参与者が互いに帰する2つの特定の欲求(『フェイス欲求』)、すなわち、自らの行為を妨げられたくないという欲求(ネガティブ・フェイス)と、認められたいという欲求(ポジティブ・フェイス)からなる(Brown & Levinson1987：13、田中ほか訳2011：17)」という。このような観点から考えると、聞き手のフェイスとは、相手に良く思われたい、好意的な態度を示したいという欲求になるだろう。一方、話し手のフェイスとは、自分の話を理解してもらいたい、またその反応を得たいという欲求(ポジティブ・フェイス)と、相手に邪魔されず自分の発話権を保持したいという欲求(ネガティブ・フェイス)になるだろう。聞き手があいづちなどの言語的な手段で反応することは、話し手のポジティブ・フェイスを満たすことになると言えよう。そこで、本研究においては、発話の効果としてのポライトネスに着目し、あいづちなどの聞き手の言語行動がどのような発話の効果を発揮するのかも合わせて考察する。

日常会話において、私たちは相手との社会的関係に応じて、意識的であれ無意識的であれ、言語行動を敏感に選択、調整している。そこで、本研究では、談話分析を通して会話参加者の相互行為を詳細に分析し、言語と社会構造の関係性を見出し、それが実際のコミュニケーションにどのような影響をもたらすかを観察する。

本研究の目的は、聞き手が会話に参加する際に使用する「はい、ええ、そうですね」などのあいづち表現や、「もうそろそろ…」という発話を引き取り「帰りましょうか」とつなげるように、2人以上の話者が共同でひとつの発話を作りあげる共話における聞き手の反応などに焦点を置き、日本語母語話者、日本語学習者(韓国人、インドネシア人)がどのように聞き手言語行動を用いてそれぞれ会話に参加しているのかを調べ、その使用実態を明らかにすることである。具体的には以下の3点を中心に分析する。

1. 日本語母語話者の聞き手言語行動が、スタイルや対話相手との社会的関係による生起変異要因(年齢差・性別差)とどのように関わっているか。
2. 日本語学習者の聞き手言語行動が、言語能力レベルによってどのように異なるのか。
3. 日本語学習者と母語話者の聞き手言語行動が、いかなる展開構造(展開パターン)を成しているのか。

以上を図示すると以下の図1のようにまとめられる。

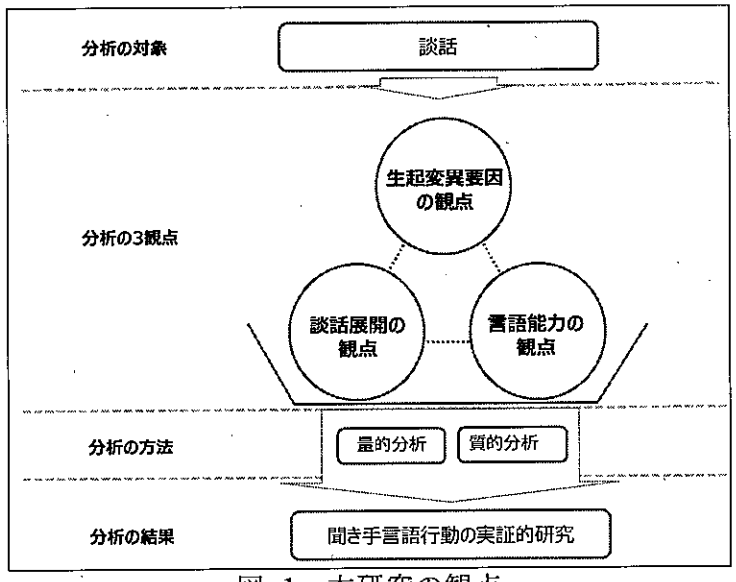

図 1　本研究の観点

2. 本研究における聞き手言語行動の範囲

本研究で対象としている共話的反応は、従来の研究でおいてあいづち表現とも共話

的反応とも言われてきた部分である。

本論では、図に示したように、あいづち的反応を感性的あいづち、概念的あいづち、(あいづち的)言いかえ、(あいづち的)繰り返し、(あいづち的)先取りに分類する。また、共話的反応については共話的言いかえ、共話的繰り返し、共話的先取り、問い返し、遮りを聞き手言語行動の下位分類とする。聞き手言語行動のうち、「言い換え」、「繰り返し」、「先取り」はあいづち的反応とも共話的反応とも捉えられるが、本論の共話の定義に従ったもののみを共話的反応として扱う。

以上をまとめた本論における聞き手言語行動の枠組みを図 1 に示す。

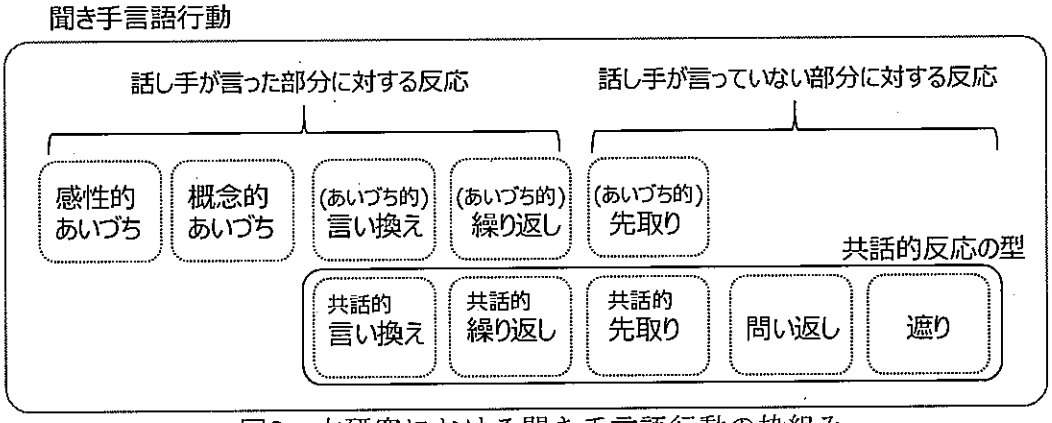

図2　本研究における聞き手言語行動の枠組み

3. 本研究の構成と内容

第1部では、本研究の背景として、本章では、本研究の背景と目的について述べた。第2章では、聞き手言語行動に関する先行研究について概観した後、本研究における聞き手言語行動の定義を行い、本研究の課題を提示した。そして、第3章では、本研究で実施した調査方法と分析対象及び分析手順について説明し、本研究における理論的枠組みである談話・会話分析とポライトネス理論について説明した。そして、分析結果として、第2部では、日本語母語話者の生起変異要因からみた聞き手言語行動を使用実態について、第4章で、対人関係によるあいづち表現のスタイルに着目しその使用傾向の違いについて、第5章で、対話相手との年齢差・性別差に応じたあいづち表現の使用実態について明らかにし、第6章で、対人関係に応じた共話的反応の型の使い分けについて考察した。そして、第3部では、日本語学習者の言語能力の観点からみた聞き手言語行動の使用実態として、第7章で、言語能力レベル別にみた韓国人日本語学習者のあいづち表現の使用実態を明らかにし、第8章で、母語話者と異なる運用上の特徴と問題点を取り上げ、その背景を分析した。そして、第9章で、言語能力レベル別にみた韓国

人日本語学習者の共話的反応の型の使用実態を分析し、日本語学習者も共話の運用ができることを主張した。また、第4部では、日本語母語話者と日本語学習者の談話展開の観点からみた聞き手言語行動の使用実態を、第10章で、母語話者が運用する談話における話し手の先行発話と聞き手の共話的反応(後行発話)の機能的関係に注目し共話の構造を明らかにし、第11章で、日本語学習者が運用する共話の構造について考察した。そして、第12章で、接触場面における日本語学習者と母語話者の共話の展開パターンを比較し、考察した。最後に、第5部では、日本語教育への応用と総論として、第13章で、日本語教育への応用として聞き手言語行動のコラム形式の教材例集を提示、第14章で、本研究のまとめを行い、分析結果から得られた結論と、今後の課題について述べた。構成を視覚的により分かりやすく示したものが、次の図3である。

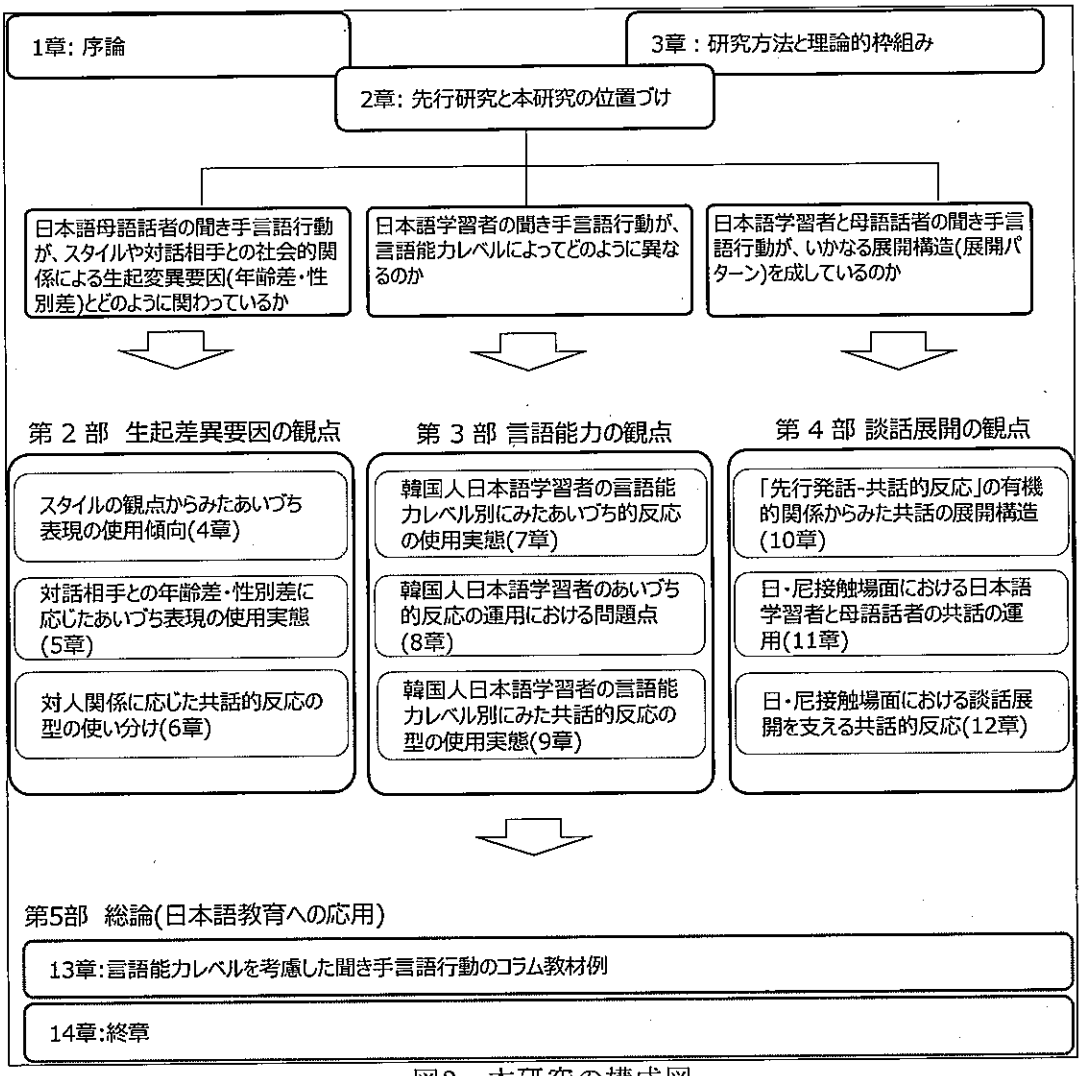

図3　本研究の構成図

具体的には、聞き手が会話に参加する際に使用するあいづち表現、共話的反応など

の聞き手言語行動に焦点を置き、日本語母語話者、日本語学習者(韓国人、インドネシア人)のそれぞれが聞き手言語行動をどのように用いながら会話に参加しているのかを調べ、その使用実態を明らかにした。
以下に、先述した研究目的と照らし合わせながら、研究の結果をまとめる。

3.1. 日本語母語話者の聞き手言語行動が、スタイルや対話相手との社会的関係による生起変異要因(年齢差・性別差)とどのように関わっているか

大まかには、以下のような結果が得られた。

- 20代女性は同年相手には「うん」系、「そう」系による普通体あいづちの使用が多い。
- 20代男性は同年相手、年上相手共に「はい」系、「ええ」系、「そうです」系の丁寧体あいづちの使用が多い。
- 丁寧体と普通体のスタイルの対立がないあいづち表現場合は、20代男女共に対同年、対年上に関わらず「あー、ふーん、へー」などの感声的あいづち表現の使用が多い。
- 20代女性同士では初対面でも丁寧なあいづち表現の使用は少ない。感声的あいづちであれ、概念的あいづちであれ、くだけたあいづち表現の使用が多い。
- 感声的あいづち表現の使用は、20代も30代も同性同士の会話では同年相手のときに多く、30代異性同士のみ年上相手の使用が多い。性別があいづち表現の使用に影響を及ぼしているとみられる。
- 20代男性同士の会話では年上に対してもくだけたあいづち表現の使用が多い。
- 共話的反応の型の場合、20代と30代との間に、年齢による使用差が確認できた。20代の男女が年上の相手に「同意」、「共感」の機能の共話的反応を積極的に示すことにより、相手に同調の気持ちを伝え、相手との心理的距離を縮めようとしているのに対して、30代男性は、対話相手の同年・年上、同性・異性に関わらず共話的反応の型をあまり使用しないことが分かった。この傾向から、30代男性は共話的反応ではない他の聞き手言語行動を好む可能性が示唆された。

これらは、日本語学習者の日本語コミュニケーションの向上のために、現実の母語話者のコミュニケーションを観察することが重要であると考え、第2部の第4章、5章、6章で、生起変異要因に着目し、母語話者の会話を分析、考察した結果である。以下で

は、章ごとの展開をまとめる。

まず、第4章ではこれまでの日本語教育でシラバスとして取り上げられることの少なかった丁寧体と普通体というあいづち表現のスタイルに焦点を当て、20代の大学生・大学院生の初対面会話を対象に、対話相手が年上か同年かによる使用傾向の違いを、以下の通り、男女別に明らかにした。

男性の使用傾向の特徴

- あいづち表現の使用について、対同年相手、対年上相手共に「はい」系、「ええ」系、「そうです」系などによる丁寧体あいづち表現を多用することにより、相手との距離を保持し丁寧さを保とうとすることが確認できた。

女性の使用傾向の特徴

- あいづち表現の使用について、対同年相手には、「うん」系、「そう」系などによる普通体あいづち表現の使用を用い、相手と良好な関係を保つために仲間意識を示すことで相手との心的距離を縮めようとすることが分かった。対年上相手には「うん」系の感声的普通体や「はい」系、「ええ」系の感声的丁寧体といった、スタイルにかまわず感声的あいづち表現を多用していることが確認できた。
- 両性に共通して確認された使用傾向の特徴
- 丁寧体と普通体のスタイルの対応がないあいづち表現については「あ」系や「ふーん、へー、ほー…」など、意味内容のない感声的あいづち表現の使用が目立った。親密な関係でより多く使われるこれらのあいづち表現を用いることで、相手との良好な関係を保とうとしていることが分かった。

次の図4は、以上の結果と考察をまとめたものである。

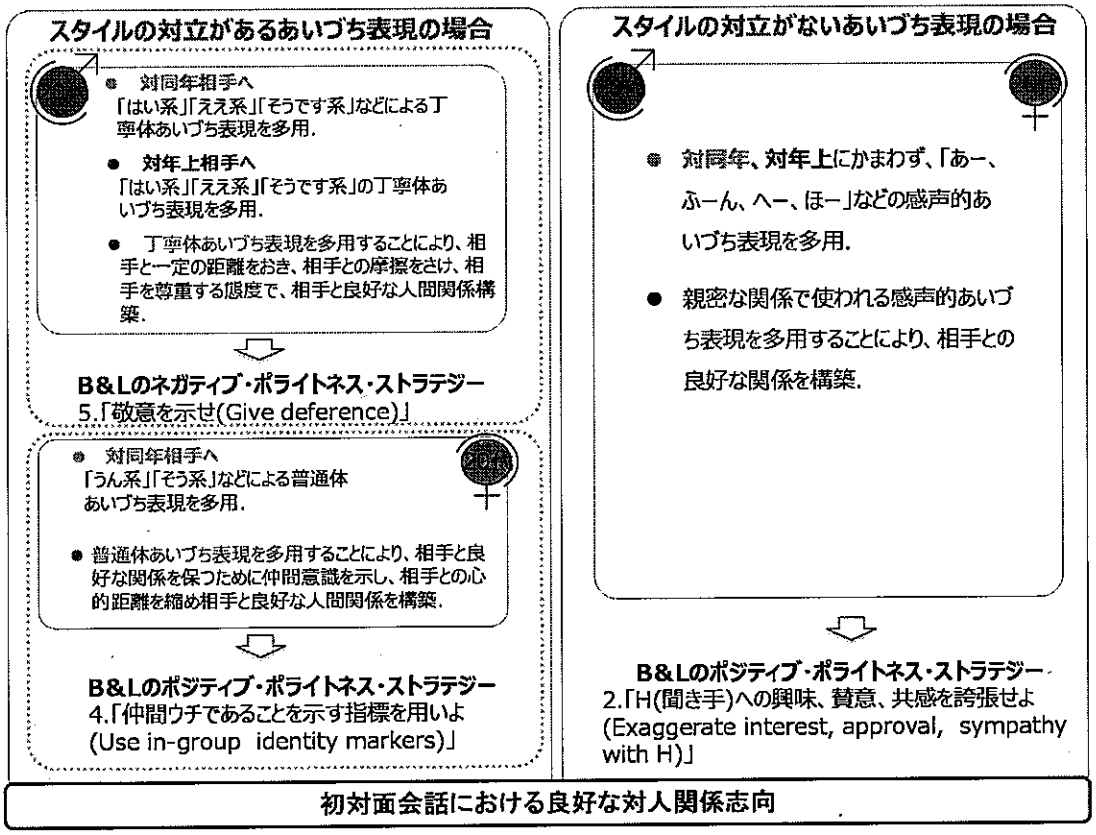

図 4　20 代のスタイルによるあいづち表現の使用傾向

次に、第5章では、従来の研究で主に対象とされてきた20代に加え、30代話者の自然談話データも分析の対象にいれ、どのような聞き手言語行動の使用様相が会話相手の年齢によってどのように変化するのかを明らかにした。またその際、主にどのようなポライトネス・ストラテジーが機能するのかについて考察した。それらを以下にまとめる。

- 「初対面では、会話相手に関係なく丁寧なあいづちの使用が多い」という仮説(1)を立てたが、20代女性同士の会話では、感声的あいづちについても概念的あいづちについても、くだけたあいづち表現の使用が多かった。この結果から、ポジティブ・ポライトネスは、20代前半の若い女性においてより表れやすいということが読み取れた。一方、20代男性同士、30代男性同性同士、30代男性異性同士では初対面会話において「丁寧なあいづち」が主に使用され、ネガティブ・ポライトネスが表れやすいことが明らかになった。
- 「会話相手の年齢が発話者よりも年上の場合に丁寧なあいづちの使用が多い」という仮説(2)の検証のために感声的あいづち表現の使用を観察した結果、20代女性同士、20代男性同士、30代男性同士の会話においては、年上相手より同年相手の

使用の方が多かった。また、30代男性の異性との会話においては、同年相手より年上相手の使用が多かった。このような結果から、性別が聞き手言語行動に影響を及ぼすことが確認できた。一方、30代男性同性同士の会話における概念的あいづち表現の使用は、対年上の会話での方が、対同年の会話よりも少ない。

「会話相手の年齢が発話者と同年の場合にくだけたあいづちの使用が多い」という仮説(3)を検証した結果、20代男性同士の場合対年上に対してもくだけたあいづちを使用する。

「はい系、え系は対年上に、うん系は対年下にその使用が多い」とする仮説(4)、「そうですね系は対年上に、そう系は対同年にその使用が多い」とする仮説(5)については、それぞれ例外があることが確認できた。まず、20代女性の対同年に使用する「え系」は丁寧度とは関係なく、ただ違和感を表明する働きがあることが分かった。また、20代男性が年上相手に、敬意の低いくだけたあいづちとされる「うん系」を多く用いるという結果が出た。「うん系」は「うーん」「ううん」などの形式で考え事をしたり、間を持たせたり、返答をにごしたりする時にも用いられていた。反対表明ができず、答えづらい場合や答えたくない場合なども使用される傾向があるので、敬意の低いくだけたあいづちとは言いきれないところがあるようである。さらに、30代男性の場合、同性同士では対同年に「そうですね系」の使用が多く、異性同士では対同年に「はい系」の使用が多かった。

次の表1は、以上の分析、考察の結果をまとめたものである。

表 1　仮説に基づくあいづち表現の年齢差・性別差による使用状況

仮説	20代女性の同性相手へ	20代男性の同性相手へ	30代男性の同性相手へ	30代男性の異性相手へ
(1)初対面では、会話相手に関係なく丁寧なあいづちの使用が多い	×	○	○	○
(2)会話相手の年齢が発話者よりも年上の場合に丁寧なあいづちの使用が多い	○	○	○ ×	× ○
(3)会話相手の年齢が発話者と同年の場合にくだけたあいづちの使用が多い	○	× ○	○	○
(4)「はい系」「え系」は対年上に、「うん系」は対同年にその使用が多い	＊1 え系	＊2 うん系	○	＊3 はい系
(5)「そうです系」は対年上に、「そう系」は対同年にその使用が多い	○	○	＊4 そうですね	○

そして、次の図5は、上記の結果のうち、表1で網掛けにして示した仮説に反する部分に注目し、ポライトネス・ストラテジーがどのように機能しているのかをまとめたものである。

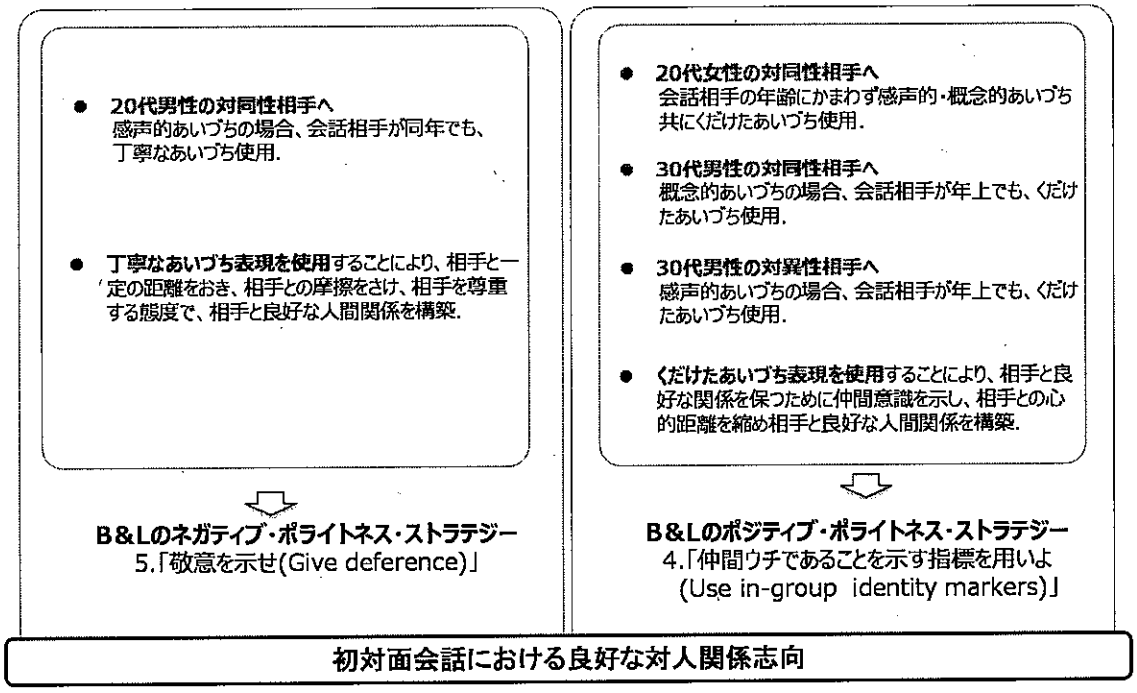

図５　ポライトネス・ストラテジーからみたあいづち表現の使用

さらに、第6章では、聞き手言語行動のうち、共話をなす聞き手の共話的反応の型については、話し手との性別差、上下関係(社会的地位・年齢)や親しさの程度などの社会的要因の影響について、特筆すべき研究報告がほとんどないことに注目し、従来の研究で主に対象とされてきた20代に加え、30代の話者の自然談話データも分析の対象にいれ、対話相手の年齢によってそれらがどう変化するのかを明らかにした。またその際、主にどういったポライトネス・ストラテジーが機能するのかについて考察した。主な結果は次の通りである。

・　20代の女性は、年上の相手の発話内容に対し主に「先取り」と「言い換え」の共話的反応の型を用い、「共感」や「同意」を示すために積極的に使用することが確認できた。一方、20代の男性は年上相手には「先取り」と「言い換え」の共話的反応の型を用い、年上に自分の考えや意見が同様であるという「同意」を示すために使用していることが分かった。こうした使用傾向はブラウンとレビンソン(Brown & Levinson1987)のポライトネス理論でいうところの、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー2「H(聞き手)への興味、賛意、共感を誇張せよ(Exaggerate interes

t, approval, sympathy with H)」と合致するものと考えられる。20代女性も20代男性も年上相手に対して年上の相手に「同意」、「共感」の機能の共話的反応を積極的に示すことにより相手に同調の気持ちを伝え、相手との心理的距離を縮めようとしているのである。

- 30代男性の場合、対話相手の同年・年上、同性・異性に関わらず共話的反応の型をあまり使用しないことが分かった。このような傾向から30代男性の場合は共話的反応ではない、他の聞き手言語行動を好む可能性が考えられる。実際、前章の表23の対人関係による感声的あいづち表現の使用傾向において、20代は920回、30代では1,290回、表24の対人関係による概念的あいづち表現の使用傾向において、20代194回、30代249回という結果から、30代は聞き手言語行動のうち共話的反応の型よりあいづち的反応を好む傾向があることがうかがえる。

従来の研究で示されている出現傾向の分析結果が一様ではないことを指摘した上で、使用が多い20代を中心に見た場合、とりわけ女性が多用すること、対年上に多用することを確認することができた。

こうして、対話相手が年上か同年かという年齢の違いが共話的反応の型の使用に影響を及ぼすことが明らかになった。

次の図6は、以上の結果をまとめたものである。

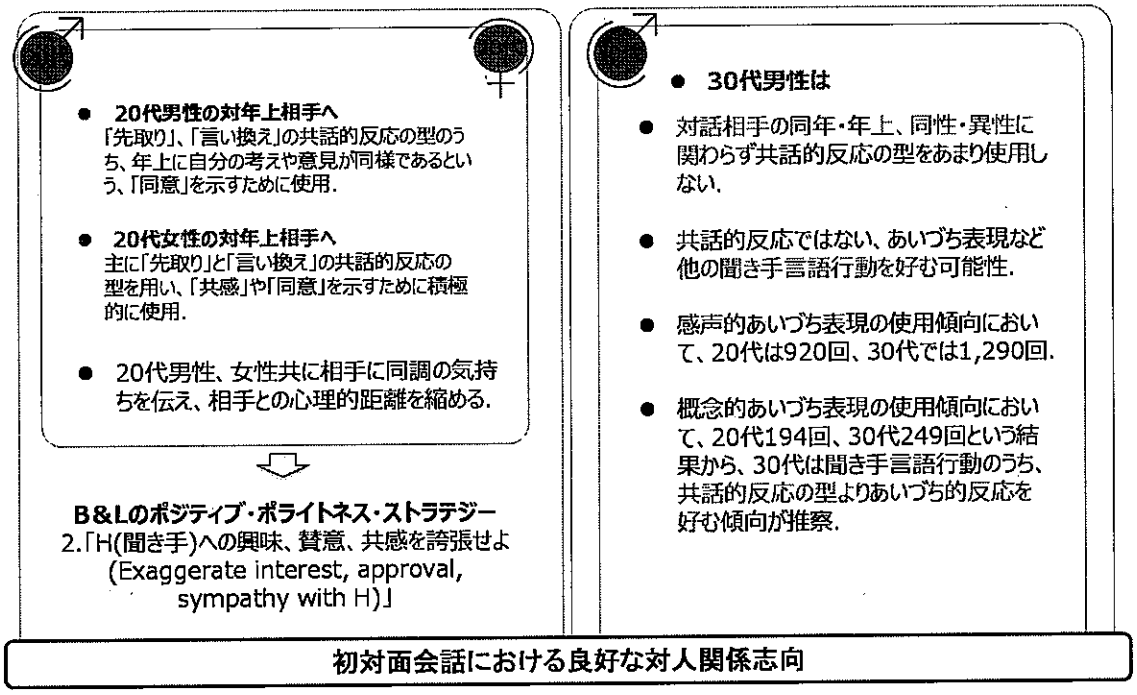

図 6　対人関係による共話的反応の型の使用傾向

上記の考察から、対話相手が年上か同年かという年齢とともに、対話相手が同性か異性かの性別差の要因が聞き手言語行動の使用に影響を及ぼすことが明らかになった。

また、聞き手言語行動の使用上の適切さは、状況に依存しており、形態が同一であっても、会話参加者の役割や場面により適切さが異なることが確認できた。あいづち表現の運用に関するこれらの知識もまた、円滑なコミュニケーションのためには不可欠であり、学習が必須な項目であろう。

3.2. 日本語学習者の聞き手言語行動が、言語能力レベルによる違いは見られるのか

第3部の第7章、8章、9章では、学習者の日本語コミュニケーションの向上のために、日本語学習者の聞き手言語行動の運用実態を把握する必要から、言語能力の問題に着目し、日本語学習者の会話を分析、考察した。

まず、第7章ではKJLの共話的コミュニケーション能力を高めるために、KJLによって使用されるあいづち的反応の機能に着目して言語能力レベル別にどのような使用傾向があるのかを考察した。また、指導の重要性が要求されるあいづち的反応については、言語能力レベル別に導入する必要性を検討した。以下に主な結果をまとめる。

- 感声的あいづちによるあいづち的反応として、初級から超級までのすべてのレベルにおいて主に「傾聴」「理解」「同意」機能を持った「はい」形式が使用されていることが明らかになった。
- あいづち的反応は、初級では主に「理解」「同意」、中級から超級にかけては主に「傾聴」機能を果たしていることがわかった。
- KJLのあいづち的反応としては感声的あいづちの方が概念的あいづちより出現数が圧倒的に多いことが明らかになった。
- 概念的あいづちによるあいづち的反応として、初級から超級までのすべてのレベルにおいて「理解」「同意」「否定」機能がほぼ同じように使用されているが、それぞれの機能ごとに、レベルが上がるにつれて異なる形式が用いられるようになることから、その用いられ方は決して一様ではないということが確認できた。
- 使用数、初出形式、違和感がある表現、日本語母語話者(NS)の使用などの選定基準により、あいづち的反応のシラバス設計を試みることができた。

次に、第8章ではKJLがあいづち的反応をうまく使用できないという現状を踏まえ、その運用における特徴と背景について考察した。確認された不自然な言語行動は、以

下の通りである。

- 母語(韓国語)の影響と考えられる聞き手言語行動
  a. 「いえいえ」「おー/おーおー」などの母語(韓国語)の使用
  b. あいづち的反応が必要な場面での不使用
- 日本語のスピーチスタイルの影響と考えられるあいづち的反応
  a. 初対面の目上の人に対する「なるほどね」
  b. 同一会話内における不安定なスピーチレベル
- 母語と目標言語との影響と考えられるあいづち的反応
  a. 同じ表現形式の繰り返し
  b. 待遇性の低い「ん」のあいづち的反応を用いることによる、談話の待遇レベルの不安定
- バリエーション不足による影響と考えられるあいづち的反応
  a. 「はい」の過剰般化
  b. 「ええ」の不使用
  c. 場面に適さないあいづち的反応:同意の「そうですね/そうなんです」または関心や興味の「あー、はあ、へー」で反応すべきところでの「はい」使用、「そう系」あいづち的反応のうち「そうですね」の使用に偏っていることなど

さらに、第9章では、韓国人日本語学習者の聞き手言語行動のうち、共話的反応の型と機能の使用実態について明らかにするため、日本語学習者と母語話者のOPIをデータとし、日本語学習者の共話的反応の型の言語能力レベル別の使用状況を比較分析した。その主な結果は以下の通りである。

- 共話的反応の型として、初級では「先取り」、「遮り」、「繰り返し」の使用が確認された。中級からはさらに「言い換え」の使用も確認された。
- 機能については、初・中級では「補足」「反論」「同意」の機能での使用が、上・超級ではさらに「相手助け」の使用も確認された。
- 共話的反応の型の運用は、「先取り」、「遮り」、「繰り返し」が「言い換え」に先立つ。
- 共話的反応の型の機能の運用は、「補足」、「反論」、「同意」が「相手助け」に先立つ。
- 学習者と母語話者のそれぞれが用いる共話的反応の型およびその機能の違いに注

目した結果、母語話者に見られた「問い返し」と「確認」の共話的反応の型と機能がKJLにはみられないことがわかった。

- 学習者は「遮り」の型を最も多く用いていたのに対し、母語話者には「先取り」の型を最も多く用いていた。

以上の通り、言語能力の観点から日本語学習者のに応じ、あいづち的反応、共話的反応の運用実態を探った。これまで、上級以上の日本語学習者であっても、あいづち的反応は不十分ではないのになぜか聞き手としての反応が不十分であること、談話展開が不自然であることがしばしば指摘されてきた。これはあいづち的反応が談話展開に十分な要素ではないためであろうと考察された。学習者の共話的反応の運用実態から、自然習得の難しさを示すことで、日本語教育による支援の必要性を明らかにした。

3.3. 日本語学習者と母語話者の聞き手言語行動が、いかなる展開構造(展開パターン)を成しているのか

第4部の第10章、11章、12章では、日本語学習者の日本語コミュニケーションの向上のために、談話展開に着目し、母語話者同士の会話場面での共話の展開構造、接触場面での共話的反応の展開パターンを把握するために、それぞれの場面における会話を分析、考察した。

まず、第10章では、共話において、話し手発話はどのような表現形式で終了するのか、また、聞き手発話はどのような反応の型をとるのか、さらに、それぞれの型がどのような機能を果たすのかを分析し、共話の構造について考察を行った。その結果をまとめると次の通りである。

- 本研究における共話の範囲は、その定義に従って、従来の研究が共話と見なしていた範囲よりも狭く規定されている。それにもかかわらず、全34会話中、29会話において共話の成立が確認できた。したがって、水谷(1993)の主張のように必ずしも共通理解を前提とするわけではなく、初対面のような共通理解を前提としない場面でも共話により相互に共通理解を図っていくことが分かった。
- 共話がなされるためには話し手と聞き手の共同作業が必要だという指摘に関連して、その共同作業において具体的にどのような表現形式が用いられるのかについて、話し手と聞き手のそれぞれの立場から再考した結果、共話をなす話し手発話の表現形式として「言いさし」、「言いよどみ」、「遮られ中止」が確認できた。その

うち、「言いさし」が最も多かった。また、従来の研究ではあまり言及のなかった「言いよどみ」や「遮られ中止」も確認できた。

- 共話をなす聞き手発話の反応の型として「先取り」、「言い換え」、「問い返し」、「遮り」、「繰り返し」が確認できた。また、反応の型が担う機能としては「確認」、「相手助け」、「同意」、「補足」、「共感」、「反論」、「理解の表明」が確認できた。そのなかで多く用いられていたのは「先取り」の型であるが、その機能は一様ではなく、話し手発話が「言いさし」の場合は「確認」の機能、「言いよどみ」の場合は「相手助け」の機能、「遮られ中止」の場合は「補足」の機能を主に果たすことが分かった。
- 話し手の先行発話の明示された部分に対して行われる共話的反応の型と省略された部分に対して行われる共話的反応の型の双方について、その形式・機能が成立要因と密接に関わっていることを分類によって示すことができた。

共話的反応の表現形式と機能が「予測」、「理解の有無」、「納得の有無」といった成立要因に基づいていることを熟知しておくことは、共話が行われる理由や目的を理解することにつながる。したがって、このことは、日本語学習者にとっても、共話を運用する際の手助けになると考えられる。このように共話的反応の型と機能を成立要因に関係付けることは、日本語教育にとって有益であると考えられる。

次に、第11章では、初対面かつ文化的背景を共有しない者同士の会話で共話がどのように運用されるかをみるため、日本語母語話者とインドネシア人日本語学習者の会話を分析、考察した。結果は次のようにまとめられる。

- 共話をなすために必要な話し手発話のうち、「言いさし」は母語話者にとってもインドネシア人日本語学習者にとっても比較的容易であることがうかがえた。しかしながら、「言いさし」が行われた発話の内容を見てみると、母語話者は相手と共に話を作り上げようとする気配りが感じられたのに対し、インドネシア人日本語学習者にはそのような意図が見られず、相違があることが確認できた。
- 母語話者、インドネシア人日本語学習者ともに最も多かった共話的反応の型は「先取り」であった。その機能を見てみるとインドネシア人日本語学習者は母語話者よりも多様な機能で共話を運用していることが分かった。
- 母語話者は、「確認」の機能を通し相手から引き出した発話を材料に、相手の記憶を刺激し、会話を続け、話題を広げようとするが、インドネシア人日本語学習者は、そこから連想されるものを「補足」することによって、単純にこれに応えてい

るという違いが見られた。

さらに、第12章では、日・尼接触場面から例を取り、共話的反応が談話の展開にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにするために、「話し手の先行発話—聞き手の共話的反応」の機能的関係に着目して考察した。その主な結果は次のようにまとめられる。

- 聞き手と話し手が双方で主導権をもって会話を進めていくことは、聞き手と話し手が協力しあいながら会話を進めていくという、談話の相互性につながる側面であることが示された。このことは、特に、共話において浮き彫りになり、共話的反応は、あいづちと同様に、会話の流れを支える発話であることが確認できた。
- 共話的反応における先行あいづちに着目した結果、母語話者と学習者の間に差はあまり見られず、ともに、先行あいづちなしの共話的反応のみによるパターンが多いことが分かった。これは従来の野畑(1996)による研究結果とは異なる結果である。
- 従来の堀口(1997)の主張に反し、先行あいづちがある場合、そのあいづちは後ろに続く共話的反応を予測する機能があるのではなく、先行発話である話し手発話に対し、同意、納得、疑問などを表すことが分かった。
- 共話的反応が談話展開に影響を及ぼしていることが分かった。また、その際、母語話者と学習者の間に相違が確認された。さらに、共話展開のパターンには話し手の意図と聞き手の理解が一致する場合と一致しない場合があることが分かった。
- 話し手発話で省略されている部分に対する共話と、話し手発話で明示されている部分に対する共話があるが、前者は主に母語話者に多く、後者は主に学習者に多いことが分かった。
- 話し手の意図と聞き手の理解が不一致の場合、共話的反応を示す母語話者の予測のずれに対し、話し手である学習者は訂正に近い反論で反応することが確認できた。一方、学習者の共話的反応が母語話者の意図とは違いミスコミュニケーションになっている場合であっても、話し手である母語話者は学習者の共話的反応に合わせた発話で、円滑なコミュニケーションにつながるように修復作業を行っていることが確認できた。

母語話者とインドネシア人日本語学習者との接触場面における談話展開を支える聞き手言語行動について考察し、共話的反応のパターンとして両者ともに先行あいづち

があまりないことを指摘した。この結果により、母語話者同士の共話的反応のパターンとの相違が指摘されたといえよう。

4.日本語教育における本研究の意義

従来の研究では、あいづちと共同発話は異なる研究対象として取り扱われてきた。しかしながら、本研究では、話し手発話に対する聞き手の発話であるという共通点から、相互行為における「聞き手」に注目し、両者を「聞き手言語行動」としてまとめて分析、考察を進めた。その結果、従来の聞き手言語行動に関する研究では言及されることがなかった点について、新たに研究成果を提示することができた。本研究の意義は、以下の通り要約することができる。

1) 聞き手との相互作用によってコミュニケーションが成り立つという言語的事実を、話し手中心の会話分析ではなく、聞き手言語行動の分析を通しても確認できた。
2) 初対面の自然談話の分析を通して、人間の言語行動の普遍性を特徴とするブラウンとレビンソン(Brown & Levinson1987)のポライトネス理論は、日本語の聞き手言語行動においても、言語形式にとらわれずその運用の機能に焦点を当てることにより適用できることが確認できた。
3) 水谷によって日本語特有の特徴として提唱された共話は、実際には日本語に独特の現象ではないこと、そして、日本語においては、母語話者のみではなく日本語学習者にとっても、本来の意味でのコミュニケーションができるかどうかは、共話が上手く使いこなせるかどうかにあることが確認できた。
4) 聞き手言語行動を「話し手の発話部分に対する反応」と「話し手の非発話部分に対する反応」に分けて、マクロな視点とミクロな視点から同時にアプローチすることにより、従来の研究で言及できなかった言語的事実が確認できた。
5) 話し手の発話に焦点を当てた従来の日本語教育に対し、聞き手の発話にも焦点を当て、相互作用として会話教育ができるように、聞き手言語行動についてどう教えればいいかを提示できた。加えて、指導と学習という教育実践にとどまらず、異文化理解への実践の一環として捉えなおす必要性も指摘した。

6) 聞き手言語行動の母語場面、接触場面の両方を分析することで、学習者に対する会話教育の現場に応用できる結果が得られた。特に、接触場面での学習者は母語話者の会話スタイルに影響を受けつつも、自ら聞き手言語行動を調整していることが確認できたので、こうした成果は接触場面の相互行為の解明に有効であろう。

7) 日本語学習者の初級、中級、上級、超級といった各言語能力における聞き手言語行動を分析し、それらが学習のどの段階で現れ、定着するのか、あるいは自然に修正されるのかについてある程度把握できた。これにより、各学習段階における聞き手言語行動の中間言語体系が明らかになり、その成果は聞き手言語行動の教育にも結び付けられると考える。